

関連学会印象記

アメリカ麻酔学会 (ASA) に初めて出席して

大野 太郎*

10月も半ばを過ぎたというのにニューオーリンズはひどく蒸し暑かった。午後の日差しの中を速足で歩くと半袖のポロシャツでは汗ばむほどで、日本の9月初旬から中旬の気候を思わせる。町の東西をミシシッピー川が流れ、その上をスチームボートのカジノ船が往来する遊び色のこい町だ。1996年度のアメリカ麻酔学会は10月19日から24日の日程で、ミシシッピー河の川岸に建てられたMORIAL CONVENTION CENTERで開催された。19、20日の2日間はリフレッシャーコース84題と、クリニカルアップデートプログラムの一部に当てられていた。演題は例年とさほど変わりがないとのことだが、内容的にはアップデートされているらしく基本的で臨床に則したレクチャーが行なわれていた。これらのセッションは有料で、興味のある内容のものをサマリーを見て選び一つにつき10ドルでチケットを買う。人気のセッションは常に満員で、100人以上は入ると思われるホールが立ち見の人々でいっぱいになる。講師はその道の第一人者が多く、内容的には高度ながら所々に軽いジョークをまじえた聞く者を飽きさせない講演も多かった。麻酔薬ではセボフルランが話題の中心で、Dr. Egerが“Controversies Surrounding the Two New Inhaled Anesthetics, Desflurane and Sevoflurane”というクリニカルアップデートプログラムの講演をされていた。Dr. P. Barashのリフレッシャーコース“Monitoring Myocardial Ischemia: A Sequential Clinical Approach”ではTEEについての新しいレクチャーが聞けるかと期待していたが、最近では術中、術後の心筋虚血のモニターとして心電図が再度注目されているという話を聞き、TEEも満足に扱えない私にとっては時代に取り残されたようで複雑な気持ちになった。また心臓麻酔の大家で成書でしかお目にかかったことなかった、Dr. J. Kaplanの講演“Anesthesia for Cardiac Surgery: State of the Art”も大変面白く聞かせていただいた。興味深かったのは聴衆のスタイルで、

スーツやブレザーをきちっと着こなした者もいれば、短パン、Tシャツにスニーカーとデイバックといったまるでドクターらしからぬ出て立ちの麻酔科医がダイエットコーク片手に床に座って講演を聞いている姿にはアメリカを感じさせられた。

Scientific Papers, 日本でいうところの一般演題の発表は、3日目の午前中から5日目の午前中にかけて行なわれた。発表形式はポスターセッション、ポスターディスカッション、口演の3種類だ。日本の発表ともしっかりと形式が異なるのはポスターディスカッションで、30分のポスター閲覧の後にスライドを使った5分間のプレゼンテーションを各演者が行い、それぞれについてディスカッションを行うといったものだ。ちょうど日本のポスターセッションと口演を合わせたようなものだ。一方、口演は発表時間は10分、質疑応答5分と一演題に対して15分の時間が割り当てられており日本の学会より若干余裕がある。私自身、海外での発表はこれが初めての機会で、留学経験もなければ全く英語に堪能でもない。7月初旬に演題採用通知が手元に届いたときは、不安が採用されたささやかな喜びにかき消されていたが、8月、9月と会期が近づくに連れて全身にのし掛かるような重苦しさが指数関数的に増し、会場を目の当たりにしたときにはそれが頂点に達するのを感じた。この時ほど抄録を出してしまった自分を悔やんだことはなく、もうこんなことは二度と繰り返すまいと心に誓うのであった。しかも私の2題あとには、ペーシングの大家であるDr. Jhon Atlee自らの演題“Do Point Electrodes Reduce Esophageal Pacing Thresholds”がひかえているのを知り、このセッションの聴衆は彼の発表を聞きに来ているに違いないことを考えると、ますます緊張した。しかし人間の気持なんていいかげんなもので、共同演者に助けられ何とか発表を終えてみると、先程までの暗い気持ちはどこへやらで、“よい経験をしたものだ。来年も強く勧めてくれる人がいれば、もう少し英語の研鑽を積んでまた演題を出してしまうのかな”などと考え始めている自分に今は少々あきれている。

*帝京大学医学部麻酔学講座